



天羽先生を送る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺迫, 正廣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/1697

天 羽 均 教 授

《履 歴》

昭和12年 6月21日 大阪府に生まれる

学 歴

昭和36年 3月 京都大学文学部(フランス語フランス文学専攻)卒業

昭和36年 4月 京都大学大学院文学研究科修士課程
(フランス語学フランス文学専攻)入学

昭和38年 3月 京都大学大学院文学研究科修士課程(同上)修了
文学修士

昭和38年 4月 京都大学大学院文学研究科博士課程
(フランス語学フランス文学専攻)進学

昭和39年 3月 京都大学大学院文学研究科博士課程(同上)中退

昭和41年 9月 フランス共和国パリ大学
パリ・ナンテール校博士課程(昭和43年3月まで)

職 歴

昭和39年 4月	大阪府立大学教養部助手(フランス語)
昭和41年 9月	フランス共和国へ在外研究のため出張 (昭和43年3月まで)
昭和46年 4月	大阪府立大学教養部講師(フランス語)
昭和50年 5月	大阪府立大学教養部助教授(フランス語)
昭和53年 4月	大阪府立大学総合科学部助教授 (フランス語・フランス文学)
昭和61年 4月	大阪府立大学総合科学部教授 (フランス語・フランス文学)
昭和61年 4月	大阪府立大学大学院総合科学研究科(修士課程) 担当(ヨーロッパ言語文化特論)
平成 2年11月	大阪府立大学評議員(平成4年6月まで)
平成 6年 4月	大阪府立大学大学院人間文化科学研究科(博士後期課程) 担当(地域言語文化特論)
平成 9年 4月	大阪府立大学総合科学部総合言語文化学科教授 (フランス言語文化)
平成11年 4月	大阪府立大学総合情報センター所長兼学術情報部長 (評議員)

《研究業績一覧》

I. 著 書

- 1) 『現代フランス生活情景』 有斐閣, 1983.8.
(担 当) 第2章 独身者たち, 第3章 老人たち
(共著者) 西川長夫, 天羽 均, 宮島 喬, 木下賢一, 大空 博,
稲本洋之助
- 2) 『ビジネスフランス語』 白水社, 1994.3.
(共著者) 天羽 均, オリヴィエ・ジャメ, 野嶋 篤, 横山 理
- 3) 『比較文化キーワード②』 サイマル出版, 1994.4.
(担 当) 扉・ドア(pp.60-63), パステル画(pp.92-96)
竹内 実, 西川長夫編

II. 編著書

- 1) 『クラウン仏和辞典第3版』(1978年2月初版) 三省堂, 1989.3.
(著 者) 大槻鉄男, 佐々木康之, 多田道太郎, 西川長夫, 山田 稔,
天羽 均
- 2) 『クラウン仏和辞典第4版』 三省堂, 1995.1.
(著 者) 天羽 均, 大槻鉄男, 佐々木康之, 多田道太郎, 西川長夫,
山田 稔
- 3) 『クラウン仏和辞典第5版』 三省堂, 2001.1.
(著 者) 天羽 均, 大槻鉄男, 木内良行, ジャン・ラマール,
佐々木康之, 多田道太郎, 西川長夫, 山田 稔

Ⅲ. 論 文

- 1) 『危険な関係』における人物像 1963.12.
フランシア7号
- 2) ジョルジュ・ベルナノスの『ウィーヌ氏』における司祭の問題 1964.12.
フランシア8号
- 3) ベルナノスにおける反抗の問題 1969.3.
独仏文学3号
- 4) ジョルジュ・ベルナノスの小説世界についてのノート 1969.3.
独仏文学3号
- 5) ジョルジュ・ベルナノスにおける欺瞞者の問題 I 1969.3.
大阪府立大学紀要(人文社会科学)17巻
- 6) ベルナノスの『悪夢』について 1976.12.
独仏文学10号
- 7) ゲルーのサロンーベルナノスの『欺瞞』についてのノートー 1985.12.
独仏文学19号
- 8) G. ベルナノスー『欺瞞』の風景ー 1990.12.
独仏文学24号
- 9) G. ベルナノスの『よろこび』における風景の変容 1991.12.
独仏文学25号

Ⅳ. 翻 訳

- 1) ジョルジュ・ベルナノス著 Georges Bernanos :
『少女ムーシェット』 *Nouvelle histoire de Mouchette*,
晶文社, 1971.4. Plon, 1937.
- 2) ジャック・フェショット著 Jacques Feschotte :
『オネゲル』 *Arthur Honneger*, Seghers, 1966.
音楽の友社, 1971.7.

- 3) ルイズ・ミッシェル著
『パリ・コミューン上
－女性革命家の手記－』
人文書院, 1971.10.
Louise Michel :
La Commune. Histoire et souvenirs,
Stock, 1898.
(共訳者)西川長夫
- 4) ルイズ・ミッシェル著
『パリ・コミューン下
－女性革命家の手記－』
人文書院, 1972.3.
同上
- 5) モーリス・デュヴェルジェ著
『ヨーロッパの政治構造
－人民なき民主主義』
合同出版, 1974.10.
Maurice Duverger :
La démocratie sans le peuple,
Seuil, 1967.
(共訳者)西川長夫
- 6) ジョルジュ・レオン著
『ラヴェル』
音楽の友社, 1974.10.
Georges Léon :
Maurice Ravel, Seghers, 1964.
(共訳者)北原道彦
- 7) モーリス・ドマ著
『ラヴォワジエ』
東京図書, 1978.9.
Maurice Daumas :
Lavoisier, Gallimard, 1941.
(共訳者)島尾永康
- 8) シャルル・ベトレーム著
『ソ連の階級闘争1917-1923』
第三書館, 1987.1.
Charles Bettelheime :
*Les luttes de classe en URSS 1917-
1923,* Maspero/Seuil, 1974.
(共訳者)高橋武智, 杉村昌昭
- 9) ガリエヌス／
ピエール・フランカステル著
『人物画論』
白水社, 1987.6.
Galienne & Pierre Francastel :
*Le portrait, 50 siècles d'humanisme
en peinture,* Hachette, 1969.

- 10) 『東欧革命②』 緑風出版, 1991.6. 『シリーズ東欧革命』編集委員会編
(担当)
フィリップ・リュドヴィック Philippe Ludwig:
「四つの文化のはざまにある *Entre quatre cultures Vilnius,*
ヴィリニウス」(pp.307-320) in La Nouvelle Arternative,
vol.10, 1988.6.
ヘルタ・ミュラー／ Entretien avec Herta Müller et
リヒアルト・ワグナー Richard Wagner:
「反対派とルーマニアのドイツ人」 *L'opposition et les Allemands de*
(pp.358-365) *Roumanie,*
in La Nouvelle Arternative,
vol.7, 1987.9.
「バルト三国」(pp.267-274) 解説
- 11) 『レ・タン・モデルヌ50周年記念号』 クロード・ランズマン編／
緑風出版, 1998.10. 記念号翻訳委員会 訳
(担当)
ジャック・ルバ Jaques Lebas:
「人道的活動の逆説」(pp.315-323) *Paradoxes de l'humanitaire*
ロベール・ルデケール Robert Redeker:
「人道的活動に未来はあるか」 *L'humanitaire devant l'avenir*
(pp.324-347)

V. その他

1) 略語で読む現代フランス

「ふらんす」, 白水社 1999年4月号～2000年3月号連載

天羽先生を送る

寺 迫 正 廣

とうとうこの日が来てしまった。これが今の私の率直な思いである。18年前に総合科学部でお世話になり始めた当時は、今は懐かしい西洋文化コース・独仏語講座・フランス語研究室に所属した。若輩の私は無知から数知れず愚行を重ねたように思う。今、思い返しても冷や汗が吹き出るが、それぞれに豊かな個性をお持ちの小泉教授、天羽助教授、田淵講師、黒崎講師(18年前の職階)の各先生方は、場合場合に丁寧な助言をしてくださったり、見て見ぬふりしてくださったり、ほんとうに寛大に接していただいた(腹のなかでは呆れ返っておられたかも知れない)。前田先生、川東先生はじめ、今は退職された独文の先生方にも本当にお世話になった。特に天羽先生には最初の出会いからずっと、お世話になりっぱなしだった。どんな些細なことも、どんな難しいことも、天羽先生にかかればすぐに解決策が見つかるような、そんな悠揚迫らぬ風情で接してくださったし、現在でもそうである。

天羽先生は周知のように、G.ベルナノスを中心とする20世紀フランス文学を広く深く研究されてきた。フランス政府給費留学生として長期滞在されたのを皮切りに、何度もフランスに旅され、また論文や翻訳を世に問われ続けたその長い研究歴が醸し出すのか、先生の風貌には、これぞフランス文学研究者という雰囲気常在に漂っている。学生たちに聞いても、キャンパスですれ違う時、見た瞬間に「ああ、この先生はフラ語の先生だな」とピンとくるのだそうだ。いつしか私は人に「フランス的ということはどういうことか」と聞かれると、まず天羽先生を思い浮かべ、それから言葉を探すようになった。

これも多くの方がご存知のように、天羽先生は仏文学研究者以外にもいろいろな顔をお持ちで、まずは、パステル画家にしてその講師。お父上の画業を受け継がれ、多彩でやわらかいパステルの色調を存分にいかした風景画、

静物画には定評があり、個展を開催されるまでになっている。学長室近くの「府大ギャラリー」に先生の絵が飾られていることはみなさん、ご承知であろう。私は個人的にも大小3枚もの絵をいただく幸運に恵まれ、朝に夕にそれらに接している。

先生は映画や音楽にも並々ならぬ関心をお持ちで、お忙しいなかでも、うまく時間をつくってコンサートや映画館に足を運ばれる。私などはひとつの仕事にかかると、もう他のことには手を出す余裕がまったくなくなるし、ひとつが終わる前に次が待ち受けているありさまの昨今では、美術館や映画館を回れるのは学会の後のちょっとした時間くらいという体たらくで、どうにも真似できないのだが、天羽先生はどんなに忙しくても、見たいものや聞きたいものは必ずチェックされ、足を運ばれる。総合情報センター長の重責を担われる今も、スケッチの会の小旅行を欠かさず、各地に出かけておられるさまは実に若々しく、かるやかだ。

天羽先生はまた大変な持続力の持ち主であられる。一番最初に驚いたのは、赴任後間もなく、ある教員人事に関する裁判記録『ひとつの抗議』（第三書館1981年）をいただいた時のことだ。採用通知を出しながら、理由なく、これを反故にし、なんら誠実な対応をとらない何とも信じがたい公募人事が某国立大学であった。本書はその大学に抗議すべく、被害者の先生を中心に、この問題を考える会を結成し、事件発生から裁判にいたるまでの経過、裁判の模様などを記録し、何が行われたかを問い、告発する貴重な報告書なのだが、5年以上にも及ぶその間の活動の記録・編集作業の中心を担われたのが天羽先生だったのである。たまたま被害者が先生の友人であったということもあるが、本職の合間に活動報告を出し続け、それを464ページにも及ぶ報告書に纏めあげる作業は常人にできることではない。それが、いわゆる研究業績リストにも載らない本であるなら、なおさらのことである。そんな息の長い仕事を先生は達成されたのだ。

このような先生のエネルギーは、その後しばらくして携わるようになられた仏和辞典の製作・出版に引き継がれている。小学館の仏和大事典の編集に参

加された後、三省堂の学習辞典『クラウン仏和』の編集者に抜てきされ、第3版から中心編集者となっておられる。すでに15年あまりずっとこの仕事を続けられ、他の学習仏和辞典がなかなか改訂版を出せない状況のなか、『クラウン仏和』だけは第5版(2001年1月)を刊行するに至っている。グローバルゼーション、IT革命の進行や、若者言葉の急展開などで新語が増えるフランス語の世界を丹念に追い続け、4～5年毎に改訂版が出る『クラウン仏和』の力は、他の編集者の方々の努力はもとより、天羽先生の存在を抜きにしては考えられない。頭が下がるばかりである。

こうした先生のお力は、むろん、学部の教育においても遺憾なく発揮され、総合科学部の授業では常に、フランス文学・文化の新しい情報を収集され続け、最新の研究動向、ホットな話題を巧みに大学院、学部の授業に反映されてきた。持ち前の好奇心も手伝ってか、ワープロ・パソコンの普及にもいち早く対応され、手書きにこだわる人々を尻目に、軽くやわらかいキーボードタッチを楽しんでおられた(今は骨董品と化したタイプライターは研究室の金庫の中で静かに眠っている)。進取の気性に富んだ授業、研究指導に学生が集まり、今なお、フランス言語文化専攻卒業生のみならず、英米やドイツ文化専攻の卒業生も同窓会に駆けつけてくるほどだ。

先生は学部の管理運営面においても大きく貢献され、教養部から総合科学部へ、そしてふたつの大学院の設置など、めまぐるしい変革・拡大の流れを常にリードされ、実現に努力を傾けてこられた。現在では総合情報センター長として、学部を超え、府立大学全体の管理運営の一翼を担われ、府財政厳しきなかでの、大学のあり方・ゆくえを模索していただいている。

ところで天羽先生は、特に健康維持のための運動をなさっている風でもないのだが、しなやかで病気しらずのお身体をお持ちである。この18年間で、先生が体の不調を訴えられたことは私の知る限りほとんどない。日本人に多い肩こり、偏頭痛にも無縁で、「肩こりとはどんなものかわからない」と聞いた時には、うらやましさに天を呪いたくなかったほどである。五十肩でちょっと苦労されたことがあったが、それも授業を休まれることはなかったし、風邪を引か

れたのも1～2度見かけた程度である。断ることを知らぬかのように、頼まれた仕事は、即座に笑顔でお引き受けになる。そんな風であるから、自分のも含めいつも山ほどの仕事を抱え込まれるのだが、悠然としてそのひとつひとつをこなされる背景には、この強くしなやかなお身体があったのではないかと思われる。

健康であることとともに、先生はまた疲労回復の名手でもおありだ。どんな状況でも、ちょっとした時間でも睡眠をとる特技をお持ちなのだ。首が揺れるでもなく、寝息をたてるでもなく、まったく静かなのでだれも気がつかないが、会議中はおろか、授業中にでも眠っておしまいになる。しかもそれは半覚半睡なのか、質問が飛んできて何らあわてることなく、「それはですね…」と、普通にしかも的確にお答えになるのだ。まさに才能である。もっとも電車の中では熟睡されることもたまにあり、「夕べは梅田・北千里間を何往復かしたらしい」とか、「寝過ごしたため、終電もなくなって吹田までタクシーを飛ばすはめになった」とか、そんな武勇伝をよく伺ったものである。前に何かの機会に、奥様から「あの人は滅多にベッドでは眠らないの」と聞いたように思うのだが、確かにそうかも知れぬと思いついたのは、映画やオペラ、スポーツの国際試合など深夜のテレビ番組等もよく知っておられることだ。眠らずに明け方まで仕事をなさっていることが推察される。しかし、それでいてすこぶるお元気なのだ。天の配剤の妙というのか、不公平というのか、すぐに疲れてへばる私などにはとてもとても真似できない技、スタイルである。

最後にもうひとつ、先生のお美食家ぶり、健啖家ぶりを思い起こしておかねばならない。私などはすぐ面倒くさくなってしまいが、海老を食べても蟹をお食べになっても、先生にかかればあつという間にきれいに殻だけになってしまふ。鮮やかな手さばき、舌さばき？である。おいしいものに目がなく、それも特に高価なものというのではなく、先生が目と耳と鼻と舌が美味をさぐりあてるのだ。そんなふうだからなのか、ありふれた食材でも天羽先生が切って並べてくださると、ご馳走になってしまうこともよくあった。不思議だが、実際そうなのだ。名人の手にかかればどんな物も生き始める。天羽先生のおかげでど

れほどのチーズを、どれほどの葡萄酒をいろいろ楽しませていただいただけろうか。心から感謝したい。

食べものの話で、この文章を終えるのは不謹慎だろうか。しかし、いいわけすれば、文化は何を食べるかというところから始まるし、何を食べるかに帰着するのではないだろうか。今、府大を去られることになって、いろんな分野で先生の蘊蓄に接する機会も少なくなってしまうと思うとなんとも寂しい。だれが決めた定年か、今この時ほど、この制度を恨みに思うことはない。まだ人の2倍も3倍も府大に貢献していただける方なのに…。ただ確かに先生には今の府立大学はあまりに人使いがあらう。先生がいかに悠然と受けとめておられるにしても、仕事を押しつけすぎている。そのことを思えばこんな望みは欲張りの独りよがりであろう。でも、それでも私は、今しばらく、先生にこの府大に留まっていたら、あれこれ教えていただきたいとのわがままな思いでいっぱいである。

それもかなわぬ今は、後に残される鍛冶先生、高垣先生、パンジエ先生はじめ、独仏研究会のみなさん、また総合言語文化学科の全先生方とともに、なんとか言語系の研究・教育に力を注ぎ、もりたたていきたい。そのことをお約束して、先生を送る言葉としたい。

天羽先生、ほんとうにお世話になり、ありがとうございました。